第三共和政下フランスの学校教育プロパガンダにおける啓蒙思想家像 (2)

―（翻訳・解題）ビュイッソン編『教育学・初等教育事典』項目「エルヴェシウス」―

杉山　大幹・辻　　和希・坂倉　裕治

〔解題〕

学校教育の体系的組織化が進められた第三共和政下のフランスで，フェルディナン・ビュイッソン（Ferdinand Buisson, 1841–1932）が編纂した『教育学・初等教育事典』（*Dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire*, 4 vol., Paris : Hachette, 1882–87. 以下『事典』と略記）は，理論においても，実践においても，政権が押し進める公教育の方向性を示す象徴の役割を担った[1]。『事典』の項目「エルヴェシウス」の末尾には，執筆者としてデュメニル（Georges Dumesnil, 1855–1916）の署名がある。ほかに，人名項目として，「ドルバック」,「ラ・メトリ」,「ライプニッツ」,「ガッサンディ」,「モンテスキュー」を，また事項項目として「想像力」（Imagination）,「模倣」（Imitation）,「知性」（Intelligence）,「趣味」（Goût）を『事典』に寄稿している。リセ・ルイ＝ル＝グラン，高等師範学校に学び，1880 年に哲学のアグレガション（大学教授資格）を取得，ヴァランシエンヌ（Valenciennes）のリセの教授となり，哲学と「世俗的道徳および市民法・政法の諸原理」を担当した。1882 年から公費によりドイツで教育学の研究に従事する機会を持ち，1884 年に帰国すると，ビュイッソンによって国立教育研究所博物館の司書補に任じられ，後に副館長となった。1887 年，トゥールーズ大学文学部で教育学の非常勤講師，1892 年に文学博士号を取得し，同年トゥールーズ大学文学部で哲学の非常勤講師，1893 年～96 年，エクサン＝プロヴァンス大学文学部非常勤講師を経て，1897 年，グルノーブル大学文学部で哲学の正教授に就任，1916 年，現職のまま没した。1896 年，カトリックに改宗し，カントとその後継者たちを徹底的に批判する「厳格な唯心論」の立場にたつことを宣言した[2]。

19 世紀フランスにおいて哲学史を描く際に,「唯物論」と「唯心論」をことさらに対置するのは，さほど珍しいことではない。両者の止揚を試みる折衷主義の立場に立つクーザン（Victor Cousin,

1792–1867）とその弟子たちの活動からも垣間見られるように，フランスの大学およびリセにおける哲学教育の基本的枠組みが形作られていく過程で，唯物論者と唯心論者の間で確執が深まっていったことはよく知られている。唯心論者たちによる唯物論への批判は，1860 年代にはっきり現れ，とりわけ，1870 年代に大学に広がった実証主義の潮流に対して唯心論者たちが抱いた不安を色濃く反映する形で展開した。

デュメニルは『フランスの友情――哲学，技芸，政治に関する新聞』（*Amitié de France : journal de philosophie, art, et de politique*）を創刊したほか，以下のような著作がある。『道徳・公民科講義』（*Cours d'instruction morale et civique*, 1882），『革命的教育学』（*La pédagogie révolutionnaire*, 1883），『北ドイツにおける教育学』（*La Pédagogie dans l'Allemagne du Nord,* 1885），『知的道徳的生における概念の役割』（*Du rôle des concepts dans la vie intellectuelle et morale,* 1892），『古典文学』（*De la Littérature ancienne*, 1898），『教育学のために』（*Pour la pédagogie,* 1902），『文学の魂と展開，起源から現代まで』（*L'âme et l'évolution de la littérature, des origines à nos jours*, 1903），『神秘主義』（*Le spiritualisme*, 1905），『非現実の詩，心理学的情景』（*Les poèmes de l'irréel, paysages psychologiques,* 1908），『哲学的対話。終わりなき哲学的概念』（*Entretiens philosophiques. Les Conceptions philosophiques perdurables*, 1910），『現代の詭弁術，我が時代の哲学についてのささやかな検討』（*La Sophistique contemporaine, petit examen de la philosophie de mon temps,* 1912）。

たとえば，『哲学的対話』では，実証主義の旗手コント（Isidore Auguste Marie François Xavier Comte, 1798–1857）と，その拠り所と目されたカント（Immanuel Kant, 1724–1804）が激しく批判されている。『神秘主義』では，クーザンとその弟子たち，そしてやはり，コントが批判の対象とされている。こうした批判を展開するにあたって，デュメニルがもっとも信頼を寄せるのが，機械的決定論に従う物体（延長）と霊的自我（思惟）の二元論を唱えたデカルト（René Descartes, 1596–1650）であり，デュメニルにとって自我の存在と神の存在は，どうしても譲ることのできない確信であった。「我思う（コギト）」こそが人間が生得的に持つ認識のカテゴリーの基盤となるものだ，とするデュメニルの信念を踏まえるなら，ラ・メトリ（Julien Offroy de La Mettrie, 1709–51），コンディヤック（Etienne Bonnot de Mably abbé de Condillac, 1714–80），エルヴェシウス（Claude-Adrien Helvétius, 1715–71）など，18 世紀のいわゆる啓蒙思想家たちは，論破すべき「唯物論」の提唱者として理解されたことは，容易に理解できよう。しかし，アグレガションを取得していたとはいえ，まだ大学に職を持たない若手だったデュメニルが，必ずしも共感を抱いていたわけでない思想家たちにかかわる『事典』の項目の執筆を複数担当することになったのは，どのような経緯からであったであろうか。それを探ることは，ビュイッソンとの関係も含め，今後の課題としたい。

エルヴェシウスの『精神論』（*De l'Esprit,* 1758）は，コンディヤックによってフランスに紹介されたロック（John Locke, 1632–1704）の認識論を基盤としつつ，これを教育と立法（législation）の問題へと応用する道筋を論じた点で，フランス啓蒙思想の潮流を代表する重要な作品の一つと目されている。宗教に依拠せず，人間の欲望を基盤として社会秩序と道徳をうち立てる可能性を論じ

ていることから，刊行直後から教会関係者たち，護教論者たちによる厳しい論難にさらされた。発売から 10 日にして出版許可が取り消されて禁書となり，後に「『精神論』事件」と呼ばれることになるスキャンダルを引き起こした。じっさいには，この騒動で標的となっていたのは，エルヴェシウスの作品そのものというよりも，むしろ，ディドロ（Denis Diderot, 1713–84）らの『百科全書』に見える，宗教的政治的権威にとって「危険」とみなされた新しい思想であった。エルヴェシウスは同様の内容の作品は二度と書かないという誓いを立て，ようやく許された。失意のうちに没したエルヴェシウスはいくつかの遺稿を残しており，それらは出版許可をとらずに非正規に印刷され，流通した。とくに『人間論』（*De l'Homme*）では，『精神論』の議論を発展させつつ，人間の能力と教育について論じられている[3]。

「教育を決定づけるのは遺伝か環境か」という問いを前に，少なからぬ教育学者たちはエルヴェシウスを環境決定論者とみなしてきた。それは，19 世紀中葉以降，欧州で国民国家の理念のもとに国民統合を実現する手だてとして学校教育体系が整えられる一方，民主主義の基盤となるはずの「機会の平等」を担保するために，その環境整備が学校教育に求められたことと深くかかわっている。いうまでもなく，この問題は微妙な困難を抱え込んでいる。「機会の平等」は「結果の平等」を保証するものではない。むしろ，結果が平等ではないことこそが，「優れた者による劣った者の支配統御」としての統治システムを正当化するための論理として機能したのである。こうした文脈のなかで，少なからぬ教育学者たちは，必ずしも歴史的，思想史的文脈[4]を考慮することなく，自説に都合のよい文言を一面的にとらえて，エルヴェシウスの教育思想を「領有」してきたのだ，と考えられる。『事典』の項目「エルヴェシウス」もまた，そのような思想の「領有」の一事例として評価することが妥当であろう。

［注］

1　ビュイッソン，『事典』については，坂倉裕治，杉山大幹，吉野敦，吉田陽「第三共和政下フランスの学校教育プロパガンダにおける啓蒙思想家像（1）――（翻訳・解題）ビュイッソン編『教育学・初等教育事典』項目「コンディヤック」および「ディドロ」――」『早稲田大学大学院教育学紀要』第 32 号，2022 年 3 月，の解題を参照。

2　cf. article « DUMESNIL (Georges) » in Patrick Dubois (dir.), Le dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire *de Ferdinand Buisson : répertoire biographique des auteurs,* Paris : Institut national de recherche pédagogique, 2002, p. 66.

3　エルヴェシウスの教育思想について，日本では永冶日出雄による先駆的研究がある。「エルヴェシウスに対するルソーおよびディドロの哲学・教育論争について――フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の問題（その1）～（その 11）」『愛知教育大学研究報告＜教育科学＞』第 25～38 号，1976～89 年。

4　この点については，さしあたり，次を参照。坂倉裕治「啓蒙主義の教育思想（2）――進歩と教育」，原聡介ほか編『近代教育思想を読みなおす』新曜社，1999 年，58～62 頁。

〔翻訳〕

エルヴェシウス　1715年にパリで生まれ，1771年に同地で没したクロード＝アドリアン・エルヴェシウスは，18世紀のもっとも高名な哲学者の一人である。オランダに出自を持つ医師の家系に生まれた。フランスにやってきたエルヴェシウスの祖父はルイ14世に，父親はルイ15世に仕えた[1]。エルヴェシウスは端正な顔立ち，才知，財産のすべてを生まれながらに恵まれていた。あらゆる種類の名誉と成功への強い執着を示した。快楽への愛も，魂の躍動を弱らせることなど少しもなかった。力強い正義感，啓蒙され慎みのある情け深さは皆に称賛された。若い頃から文学と哲学で名を上げようと努力した。マリー・レシュチンスカ[2]の庇護によって得た，年間30万リーヴルもの収入をもたらす徴税請負人の官職を8年で手放し，以後，研究に専念した。リニヴィル嬢[3]と結婚し，非の打ち所のない仕方で幸せにした。夫の死後，妻の方も夫への貞節を守った。1758年，エルヴェシウスは『精神論』を公刊する。この書はスキャンダルを引き起こした。司教たちはこぞってエルヴェシウスを糾弾し，『精神論』があたかも『百科全書』の要約であるかのように，激しい非難を浴びせた。エルヴェシウスは宮廷の大膳職の職を失い，『精神論』は発禁処分，焚書とされた。エルヴェシウスは繰り返し主張の撤回を余儀なくされた[4]。追及に嫌気が差したエルヴェシウスは，これより以後，生前には著作をまったく公にしなかった。しかし，沈黙のうちに仕事を進め，『人間論――人間の知的諸能力と教育について』を執筆した。この著作はエルヴェシウスの死後はじめて公刊されるべきものとされ，1774年にロンドンで公刊された。『人間論』においては，自らの思想を覆い隠さなければならぬという配慮から解放された著者は，言葉を濁したり，具体例に手心を加えたりすることもなく，大胆極まりなく，力を抜くこともなく，自らの思想を思う存分に開示している。

自ら繰り返し明言しているように，エルヴェシウスの哲学体系の出発点はロック哲学にある[5]。英国の哲学者ロックの哲学をエルヴェシウスは次のように要約している。「精神は観念を束ねたものにほかならず，観念は感覚器官に由来する」（『人間論』ロンドン刊，1774年，第1部，第2巻，438頁）[6]。

私たちの国民に特有の論理的・体系的精神によってロック哲学を吸収したフランス哲学は，可能な限り単純で完全な理論を提出しようと，早い段階から努めていた。身体的にものを感じとる能力のうちに人間の諸能力の起源があることを示すべく，コンディヤックは人の姿形をした立像を用いた有名な仮説を案出した。ものを感じる能力のないこの人間の似像に，コンディヤックはものを感じる能力を与えることによって，感覚が与えられるやいなや，どのようにして，感情，観念，理性が立て続けに生じるはずであるのかを，そうして他の人間たちと同じように立像を一人の人間となすように生命が吹き込まれるのかを，示してみせた。かつてデカルトは，私に物質と運動を与えてくれれば世界を一から作り直してみせよう，と言った。コンディヤックは，人間の姿形と感覚を与えてくれれば人間を一から作り直してみせよう，と言っているように思われる。

エルヴェシウスの心を占めていた第1の関心は，まさしく，あらゆる人間は生まれた時にはコンディヤックの立像のようなものであり，単純で混じり気のない受動性しかなく，生まれつきの傾向や本源的な素質などなにも持たない，ということであった。その結果，将来どのようにその子どもが発達していくのかをあらかじめ見通すことは不可能ということになる。あるいはむしろ，発達は専ら外的な影響によって決定づけられるということになる。

このような理論がいかに不可解に見えるとしても，それはロックの理論の必然的な帰結にほかならなかったのであり，この点を指摘しておくことは重要である。すべてが感覚器官を通じて我々にもたらされるのであれば，まだなにも感じたことのない精神は，いかなる形態も方向性も持たない。正しくは，精神そのものが存在しない。というのも，精神は感覚を束ねたものにほかならない，ということになるだろうからである。このような考え方は，経験こそが白紙状態の精神に独特の特徴，性質を刻み込むのだとするタブラ・ラサ説に比肩しうるものと言えなくもない。18世紀以降，生得的な傾向性が存在することが明白になったことで，生まれたばかりの個人を，あたかも別の種であるかのように他と異なるものにする，生涯変わることのない特徴に由来する反論不可能な差異を前にして，感覚論は後退を強いられた。ついに感覚論は本源的な能力の存在を受けいれたものの，次のように主張した。あらゆる存在者が，とりわけ人間が，他ならぬある特定の発達の道を不可避的に辿らされるような，はっきりした傾向をもって生まれてくるのは，永きにわたる印象の蓄積を先祖から継承しているからである。いわば，身体的・精神的に前もって形成されているようなものであり，人間はその影響を免れることができない。しかし，数世紀にも渡って獲得されたこれらの性質はすべてが受動的に獲得されたものであり，コンディヤックの立像のように，そもそもは，専らものを感じる能力に由来するのである。これは18世紀の感覚論者たちが新生児に措定したタブラ・ラサを，原初の粒子において，種ないし生命の起源に当てはめることである。しかし，自然諸科学がいまだ遺伝法則の助けも，遺伝法則と結びついた進化論の助けも与えていなかった18世紀にあって，感覚論者たちに別のやり方があっただろうか。このような事情から，エルヴェシウスは自分自身と自身の体系に忠実に，かの有名な知性の本源的平等性のパラドクスを提示した。実際のところ，それはほとんど何も獲得していないという意味での平等性でしかなかったのだが。

問題は，原初的で，ある意味で消極的ともいえるこの精神の平等性が，積極的に知識を獲得する能力の平等性を意味するのかどうかを知ることであった。一見すると，答えは否定であるように思われる。エルヴェシウスの理論がどれほど厳密であれ，万人が同じような身体のつくり，気質をもって生まれるわけではないことは，認めないわけにはいかなかったからである。精神を持っていないという点についてであれば，万人は似たりよったりだと言い張ることもできよう。しかし，身体，身体器官，そして他ならぬ感覚器官といった，すでに持っているものについて人間たちに違いがあることは，まったく明白である。人間たちの間の違いについては考慮に入れないと心に決めたエルヴェシウスは，まずもって検討の範囲を「全体的に良好な身体組織を備えた」人間たちに限定せざるを得ない（『精神論』第3編第27章，440頁他）[7]。しかしながら，上記の「全体的に良好な

身体組織を備えた」人間たちのなかには，他の人間より少しばかり鋭敏な感覚器官，少しばかり優れた記憶力や注意力を自然から授けられた人たちも存在する（同上，第1編[8]，251〔～252〕頁）。そうした人たちは，幸運の女神が味方して，幸せをあらかじめ運命づけられた存在，前もって才能と天才を分け与えられた存在なのではないだろうか。

まさにこの点で，エルヴェシウスの奇妙な独創性が発揮されるのである。まだ空っぽの精神の持ち主たちの間に打ち立てた同一性と平等性を，現実の事実の領域に，すなわち様々に異なる仕方でものを感じとる人々の間にも見出そうと，執拗に試みている。まさしく，エルヴェシウスによれば，精神の力量を満たすべき，ものを感じる能力は人によって異なるというのに，このような同一性を見出そうとしているのである。

感覚器官の鋭敏さは天才をつくりはしないこと，未開人〔旅行記などで紹介されたヨーロッパ文明から遠く離れた地で暮らす人〕は我々よりも鍛えられた感覚器官を持っているのに偉大な人物ではないことを証明するのは，エルヴェシウスにとって難しいことではなかった。

記憶力については，専ら注意力によって左右されるものだとエルヴェシウスは考える。それゆえ，注意力はつまるところ，精神の強さと広がりを決定する唯一の能力と見なされる。ビュフォン[9]と同じく，エルヴェシウスはすすんで次のように述べる。「天才とは長きにわたる忍耐に他ならない」。しかし，デカルト主義者にして観念論者でもあったビュフォンにとって，忍耐は演繹する際の忍耐を意味していた。これに対して，感覚論者であるエルヴェシウスにとっては，確認し，観察し，注意を向けて帰納的に推論する忍耐を意味していた[10]（『精神論』第2編第1～4章）。

この意味では，いったい誰が天才になる素質を持っていないなどということがあろう。実際，あらゆる人が天才となりうる。「自然は，全体的に良好な身体組織を備えたすべての人間に対して，より高度な観念へと自らを高めるために必要不可欠な程度の注意力を授けた」（『精神論』第3編第4章，217頁）[11]。では，実際に万人が天才となっていないのはなぜだろうか。それは，「注意とは，人々が常に避けようとする労苦ないし苦痛だからである。もっとも，この苦痛を快楽に変える特有の情念によって突き動かされているばあいはその限りではないのだが。それゆえ，人間精神の優越性と結びつけられる強力な注意力が授けられるために充分なほどの強い情念を抱くことが，その本性によってすべての人間に可能であるのかどうかを知ることが，問題である」（同上）。

この新たな問いに対しても，またもやひるむことなく，エルヴェシウスは可能であると答える。

しかし，反論があいかわらず立ちはだかる。注意力によって自分を天才の高みにまで引き上げるのに充分なほどの強力な情念を胸に抱くことが誰にでもできるのだとしたら，どうして実際にそうした情念と，その結果としてもたらされるはずの精神力を持った人間がこれほど僅かであるのか。

それは，「情念の力は，情念をかき立てるために用いられた方法が持つ力とつねに釣り合うものだからである」。情念を掻き立てる原因は2種類ある。第1は，環境と状況から偶然にもたらされる。割り当てることもできず，なんであるのかを特定することもできず，取り除くこともできない。これが，こんにちに至るまで，偉人を幸運の産物としてきた。他方で，情念をかき立てる人為的な方

法がある。この方法は統治に左右されるもので，道徳学と教育学を構成するものである。

このように，エルヴェシウスによれば，絶対的な決定論が，完全な仕組みが，はじめに固有の生得的な自発性など完全に欠いたものとして示される人間精神の歩みと進歩を決定づけるのである。人間精神は，快楽を求め，苦痛を避けるように促す，ものを感じとる能力だけに導かれて，与えられた快楽の魅力に受動的に従う。引力と遠心力に従って動くモビールのようである。この，精神という名で飾られた，自力で動くこともできないものが，そもそも，苦痛や快楽を覚えることなどありうるだろうか。生得的になにも備えていないというのであれば，いったいどのような性向を前提として，ある感覚が心地よかったり苦痛であったりするのだろう。この点について，エルヴェシウスも，感覚論学派の他の思想家も，等しくなにも語っていない。しかし，このような理論において，並外れた，卓越した，度外れな，他を圧倒する地位が教育に与えられていることは，たやすく見てとれる。

精神が環境によって作られるものにほかならないのだとしたら，環境を巧みに整えることで，すなわち適切な教育を与えることで，精神にかかわってなんでもすることができることになる。実際，それがまさにエルヴェシウスが主張していることである。エルヴェシウスの2点の著作から，我々がここに述べたのと同じくらい断定的な調子で，同じ主張が示された文章を無数に引用することができるはずである。「教育にはすべてが可能である」とエルヴェシウスは『人間論』（第10部，第1章，〔第2巻〕372頁）で述べている。「人々の間に認められる精神の違いは，人々が置かれた様々な環境と，授けられた教育の違いによるものである」（『精神論』，第3編，第27章，440頁）[12]。「人々の間に見受けられる精神の著しい差異は，授けられた教育の相違によるものである」（同上，26章と各所）。ものごとの一面しか見ないこの風変わりな能力と，専ら排他的な原理原則によって体系化しようとこだわるあまり，エルヴェシウスは，常々打ち負かそうとしてきたモンテスキューに抗して，また，経験論の論理に抗して，気候も自然（フィジック）環境もまったく考慮に入れる必要がないとし，すべてが人為（モラル）によって説明できるし（同上，27章，440頁），諸民族の情念の多様性は，専ら統治形態の差異に由来するのだ，などと言い張るにいたる（『精神論』第3編第14章～第21章，他）。

このようなものの見方の結果として，エルヴェシウスにとって，諸民族の間に見られる幸福と不幸，美徳と堕落は，政治，立法，教育によって機械的に決まる結果に還元される。法が習俗になすこと以上に習俗は法に対してなすところがあるという真理，各々の民族，時代には，それぞれに突出した天才が存在するという真理に，エルヴェシウスはまったく思いいたらないのである。よい立法のためによい教育が民族の幸福を準備するのだが，人々の天才が生じるのは魔法によるものであるだろう[13]。こうしたユートピアは，かつて，しばしの間，革命議会の政令や，政治的活動に身を投じた人たちが追い求めた「絶対的なものの探求」においては，それなりの故があった。しかしまた，エルヴェシウスの名誉のために，これほど力強く，これほど広範囲にわたって，教育が担う役割を示した人は断じてなかったのだと言ってもよかろう。すでにアリストテレスが示唆していたように統治形態と教授法のありようが結びついていることが，これほどまで鋭い洞察と深い理解のも

とで解明されたことは，断じてなかったのである。

この種の社会学的法則に関する論議に触発されて，エルヴェシウスのこのうえなく確固たる，このうえなく新奇な，最良のくだりが生まれた。まずは身近で行われている教育を検討することから手をつけた。エルヴェシウスを最初に驚かせたのは，教場で幅を利かせていた教えが矛盾していることであった。若者が教え込まれた原則に則って人生を歩むべきでなく，与えられた知識を用いるべきでもないということが分かる，皮肉たっぷりな例によって，この矛盾が示される。「若者たちの記憶力をいっぱいにしている諸観念を精査したり，若者たちが受けた教育を若者たちが果たすべき境遇と比べてみたりするなら，こんな教育は，ギリシア人たちが拳闘や競走で賞を争うべくオリュンピア祭に送り込む者たちにフルートの先生しかつけていなかったと仮定するのと同じくらい馬鹿げている，と誰でも気がつくであろう」（『精神論』第4編第17章，632頁）[14]。

かかる矛盾について検討したエルヴェシウスは，その原因を次のように考えた。「教育は，利害が相反する2つの権力に委ねられている。その結果，教えは必然的に，正反対の，相異なるものとなる。一つは霊的な権力であり，いま一つは地上的な権力である」。後者は，この地上で民に幸福をもたらそうとするので，すすんで民の情念を育み，情念を偉大なことへと，また同時に，この地上で法にかなった享楽へと向けさせ，前者は逆に，現世にとらわれてはならないと，地上にかかわることを軽蔑せよと説き，情念を良心に跪かせようとする（『人間論』第1部，第9章，〔第1巻,〕31頁）。ここには相容れない2つの原則がある。フランス革命期に教育が辿った歴史，教会の支配下にある教育と脱宗教的な近代国家との戦いの様は，この点でエルヴェシウスが透徹した眼差しを持った思想家であったとお墨付きを与えるように思われる。

エルヴェシウスによると，霊的な権力と地上的な権力とは何としても同じ手に握られていなければならない（『人間論』第1部，脚註46，〔第1巻,〕86頁）[15]。この結合は，啓蒙された為政者に資するものとなるようでなければならない（同上，第15章，〔第1巻,〕59頁）。したがって，すべてが完全であるためには，次の2つのことさえなされればよい。すなわち，為政者が教育上のあらゆる教えを唯一の目的に関係づけること，そして為政者が信任を得ていること。

では，教育の目的は何でなければならないだろうか。それは最大の公益であるべきだろう（『人間論』第1編第10章，〔第1巻,〕37頁）[16]。そして，「人間の教育を偶然に左右されないもの」とすることによって信頼を得る方法とはなにか。「真実しか教えないことである。誤謬は常に矛盾するものであるが，真実は決してそのようなことがない」（同上，第10章，37頁）[17]。さらに次のような決まり文句が付け加えられる。「それについてすべての市民がひとしく正確で明確な観念を持つことができるような，公益に一致した単純で明快な原理で迷信を置き換えること」（同上）[18]。

ここで示されるエルヴェシウスの実り豊かな思想は，まったく疑いの余地がないほどに明白で確実な教えによって，自己犠牲の精神をかき立て，愛国心を吹き込み，公的・私的な徳のあらゆる原理原則を教え込むことを通じて，子どもの感情を社会への献身に導くような公教育体制が存在しうる，とするものである。そのうえで，教育が始めた仕事を引き継いで，個人の利害関心が公益と常

に結びつくように法の働きと情念の働きをうまく調整することが，国家の責務となるであろう。

それゆえ，エルヴェシウスの教育計画の第1部は道徳教育を構成している。今日の我々はまさしく，エルヴェシウスが道徳教育に関して示した指針に従って，まさしくエルヴェシウスが指摘した欠陥を補う作業を遂行しているだけであるように思われる。「教育の道徳にかかわる部分は，異論の余地なくもっとも重要な部分であるにもかかわらず，もっともないがしろにされている。道徳学を教えるような公共の学校は一つとてない。第3学級から修辞学級まで，コレージュではなにが学ばれているだろうか。ラテン語で韻文詩を作ることである。道徳あるいは倫理と呼ばれる勉学にどれほどの時間が割かれているだろうか。せいぜい1ヶ月である。そうであれば，有徳な人，社会に対する義務をよく弁えた人に出会うことが極めて稀だからといって驚くべきことがあるだろうか」（『人間論』第10部第6章，〔第2巻,〕389頁）。

個人そのものにかかわることで，職業生活に入る前に教育が与えるべきことに関して，エルヴェシウスは追求されるべき2つの課題を明確に区別する。第1の課題は，「より頑強な身体をつくる」ことである。エルヴェシウスは，エマソン[19]より前に，人間はまず優れた動物でなければならないと主張したのである。この課題を達成するために，「範に取るべきは古代ギリシア人たちである。というのは，かれらは身体の鍛練に敬意を払っており，身体の鍛練がまさに彼らの医学の一部を成していたからである」（『精神論』第4編第17章，632頁）。

第2の課題は，「いっそう啓発された精神」を形成することである。エルヴェシウスは「この点に関して人々は，このうえなく粗野でこのうえなく修正が容易な悪習を改める準備すらできていないと指摘」することから論を始める（同上）。続いて，エルヴェシウスは〔ラテン語の勉学を〕「自国語の理にかなった勉学」に切り替えることを求める。「卒業するやたちまちに忘れてしまうような死語の勉学に8年から10年を浪費すること以上に馬鹿げたことがあるだろうか。というのも，人生において，ラテン語を用いることなどほとんどまったくないからである。若者をそれほど長くコレージュにとどめておくのはラテン語を教えるためというよりは，労苦に励み勤勉に仕事に従事する習慣を身に着けさせるためである，などと言ってみても虚しい。そうした習慣を身に着けさせるためなら，もう少しやりがいがあってうんざりさせるところの少ない勉学をさせることもできるのではないだろうか。ごく若い頃，学びたいという欲求を私たちにかき立てたり自然的な好奇心を若者たちのうちで消してしまったり，弱めたりする恐れはないだろうか。もし，いまだ激しい情念に気をそらされることなどまったくない年頃に，無味乾燥な単語の勉強ではなく，物理学，歴史，数学，道徳，詩などの勉学に置き換えて与えたなら，この自然的な好奇心はどれほど強化されるであろうか」（同上，633頁）。フランス革命期の教育論者たちは，まさにこのように考えて，旧来の修辞学に関する勉学の伝統を，いささか百科全書的でもある科学的な教育の計画に変更するよう提案することになる。

そもそも人間は，全般的な知識をもって社会で生きるように定められているわけではない。人間には特定の境遇が必要である。エルヴェシウスはそれゆえ，人々が教育を受ける期間を「物事に関

する勉学，人がまさに果たすことになりそうな職分と関係の深い物事の勉学」（同上，635 頁）に費やすよう望む。ここには，後に職業教育という名で実践されることになる教育のかなり掘り下げた原型が示されている。

我々はこれまで，エルヴェシウスが示す教育計画の大枠とその 3 つの目的，すなわち人間の道徳的・身体的・知的形成――ここに職分についての知識をもった専門家の育成というもう一つの目的が重ねられている――を確認してきた。以下では，エルヴェシウスの教育方法について詳しく見ていこう。原理的には，この方法は「人間たちに望まれる才能と道徳を獲得させる状況に人間を置くこと」にある（『人間論』第 10 部第 1 章，〔第 2 巻，〕376〔～377〕頁）。では，その実現のためにもっとも適した手段とはどのようなものだろうか。

エルヴェシウスは家庭教育より学校教育の方がはるかに優れていると考えている。この考えはおそらく正しい。しかし，この考えに目を曇らされて，さらにいつもの癖も影響して，エルヴェシウスは排他的な原則を打ち立ててしまう。「公益は至高の法である」（『人間論』第 10 部第 8 章，400 頁）。プラトンの国家における子どもの教育を想定しているのか，それとも，いっそう共産主義的で，いっそうフーリエ主義的なスパルタの教育を考えているのかは定かではないが，エルヴェシウスは，子どもと家族のあらゆる絆を断ち切ろうとさえした。まるで，後々子どもが祖国の人間であると同時に家庭の人間でもあることがあってはならないかのようである。「ほとんど常に，両親の家に子どもがいることはない，というようにしなければならない。長期休暇中や休日でさえ，帰省して社交界の人々の会話や振る舞いから自分の学友を害する悪徳を引き出すことがあってはならない。一般に，最良の教育とは，両親とはもっとも遠く引き離されて，授業で習う考え方とは相反する考え方が混ざることがもっとも少ない教育である」（『人間論』第 10 部第 3 章，〔第 2 巻，〕380 頁）という。集団での教育をより優れたものと考える理由として，エルヴェシウスはさらに次の点を付け加えている。第 1 に，若者が教育を受ける場の衛生管理が万全であること。第 2 に，規則が厳格であること。第 3 に，競争心がかき立てられること。第 4 に，知的水準の高度な教師が確保されること。第 5 に，集団教育は健康で丈夫な心身を育成するということ（『人間論』第 10 部第 3 章，〔第 2 巻，〕380〔～381〕頁）。言うまでもなく，エルヴェシウスのこうした主張のいくつかは批判の対象となるように思われる。とはいえ，そうした批判は読者諸賢がそれぞれの立場から行われるのに委ねたい。

個々の具体的な知識を教えるためにエルヴェシウスが推奨する個別的な手順について，長々と記すことはさし控えたい。エルヴェシウスは比較法学を講じるように欲しているが，我々には，これはコレージュの生徒たちの知性にはあまりに抽象的であるように思われる（『人間論』第 10 部，注 7〔，第 2 巻，460 頁〕）。子どもに正義感を抱かせるために，模擬法廷の活用を提案する（同上，注 9，〔，第 2 巻，〕459 頁）[20]。もし，子どもにぜひともラテン語を学ばせたいならば，実際にラテン語を使うことによって実践的に教えなければならない（同上，注 9，〔第 2 巻，〕461〔～462〕頁）。最後に，エルヴェシウスは，こんにちなら我々が道徳・公民教育と呼ぶであろうものにあたる，カテキズム

の素案を作成している（同上，第10編第7章，〔第2巻,〕390頁）。とはいえ，エルヴェシウスはこれらすべての点について究めたなどというほど，細々とした点まで漏れなく扱おうなどとするほど，尊大であったわけではない（『精神論』第4編第8章，632頁）[21]。次のエルヴェシウスの言葉は，これらの点すべてを要約したものとみなすことができる。「一方で，方法を単純化すること（これは教師の仕事である），他方で，競争心をかき立てること（これは政府の仕事である），これだけが重要である」（『人間論』第10部第6章，〔第2巻，388〜〕389頁）。

まずは教育に重要性を認めるエルヴェシウスの高い志に賛辞を送ろう。ところで，エルヴェシウスの体系のもっとも優れた点は，教授法と統治形態の間にうち立てた緊密な関係にあると思われる。この点で，エルヴェシウスは，ルソーよりもおおいに優っている。ルソーは，生徒を世間から切り離すことで，抽象的なものとして，まったく架空の存在として，生徒を我々に提示する。エルヴェシウスは個人をその同類たちから切り離さず，社会との必然的な関係性のもとで，社会的状態において，すなわち，人間にとって真に自然な状態において描いてみせた点で功績がある。エルヴェシウスは，必要と考えられる変革が教授法においても可能となり，自然にかなったものとなるようにするには，統治と公法の諸原理がどれほど変わらなければならないものか，当時の状況をみても，またエルヴェシウス自身の境遇を考慮してみても，ほとんど期待しえなかったほど完全に明瞭なかたちで示したのである。いささか狭量で，視野が広いというよりむしろかたくなな精神の持ち主ではあったとはいえ，この点に関しては正しい考えを導き出し，さらにその先へと論を展開した。近年の社会学が到達した思索に迫る勢いで，あらゆる才能を引き出し，あらゆる活力をかき立て，あらゆる徳を奨励する壮大な教育体系は，いかなる専制のもとでも――それが宗教的なものであるにせよ，政治的なものであるにせよ――成立しえない，と証明した（『精神論』第4編第17章。『人間論』第10部第7，8，9，10，11章）。エルヴェシウスは，このように，はるか以前に，神学的原理から解放された国家のうちに発展し，各人のあらゆる努力を祖国の利益へ向けようとする，リベラルで国家が主体となる新しい教育のために地ならしをしたと言えよう。

知性の平等に関するパラドクス，より正確に言えば，人間が知性を持たずに生まれてくることに関するエルヴェシウスのパラドクスは，ルソーが逃れられなかったいくつかの誤謬からエルヴェシウスを守った。エルヴェシウスは，ルソーのように，人間が創造主の手を離れるとき完璧なものであったなどとは認めることができない。「いかなる個人も良く生まれるわけではなく，いかなる個人も悪く生まれるわけではない」とエルヴェシウスははっきり述べている（『人間論』第5部第3章，〔第2巻,〕14頁）。そのようにしか考えようがなかった。というのも，エルヴェシウスにとって生まれたばかりの人間は，実のところ，いまだ無だからである。この原理から生じる最良のものとは言いがたい一つの帰結は，教育にあたって，褒賞とならんで懲罰も差し控えたりなどしない，ということである。なぜなら，いまだ良い人間ではない人間を良い人間へと変えることは，すべからく良いことだからである。さらに，なによりも，より幸いなことに，無知という，あのルソーの有名な自然状態と切り離せない状態は，必ずしも善ではない，という結論が導かれる。それどころか，

この無知という状態は，おそらくは，多くの悲惨と悪徳の源泉，それらと歩みを共にするものであろう。ルソーの見解に反対して，エルヴェシウスは近代的科学が否認できない厳密さをもって，「自然人は残酷であるに違いない」（同上，第4章〔第2巻，23頁〕）と証明する。では，人類の取り柄，長所，美徳，幸福は，いったいなにに由来するのだろうか。文明，学芸の文化，啓蒙，社会的状態の恵みたる教育に由来するのであり，換言すれば，習俗の堕落と人民の衰滅，帝国の破滅の原因だとルソーが考えたあらゆるものに由来する。エルヴェシウスの出発点であるパラドクスによって，ルソーの到達点であるパラドクスを反駁するよう導かれたのである（『人間論』第5部第8～11章，第6部第1～2章）。

つまるところ，知性の平等に関するエルヴェシウスの主張は，いくつかの実践の結果を考慮に入れてみれば，一見してそう思われるほどにないがしろにしてよいものでもない。この主張は，あるところまでは，一斉教授を成立させるための必要条件ですらあるように見える。公的な一斉教授を構築する際には，おおよそ同じものを把握・理解し，同一の環境および教育から同程度の変化を受ける，ほとんど同じような精神を相手にしていると前提する必要がある。そうであれば，エルヴェシウスの主張は真理に近い公式のようなもの，使いやすく，ときとして必要不可欠で，有用ですらある仮説，新しくてよく考えられた方法を生み出しうる仮説となるかもしれない。エルヴェシウスのパラドクスについて完全ですっかり啓発された判断を下すためには，ジャコト[22]を始めとする教師たちの実践まで検討の範囲に含める必要があるのではないだろうか。

したがって，エルヴェシウスの教育論の根本的本質的な欠陥は，知性が平等だという主張ではなく，人間が知性をもたずに生まれてくるという主張にあると思われる。ルソーの生徒が，自らの自然にかなった発達に従わせる生得的な傾向によって動かされ，精神と心を獲得する以前に自ら行動するのに対して，エルヴェシウスが描く人間は，魂を欠いたあわれな人形であり，操り糸のように自らを動かす情念が教育と政治体〔国家〕によって与えられるのを待っている。したがって，すべてが国家という抽象的な組織のなかで解決されるのである。それゆえ，自身に内在する立派な価値をことごとく欠いたエルヴェシウスが考えるこの人間は，大革命が権利を認めて栄誉を与えようとした人間とはまったく異なる存在であり，与えられた状況次第では政府の道具にならないとも，他人の情念の餌食にならないとも，限らないのである。人間を心から愛していたエルヴェシウスが，このような運命が人間〔男性〕に待ち構えているはずはないと考えていたと認めなければならない。しかしながら，残念なことに，女性については同じことを言うことができないだろう（Damiron, *Mémoire sur Helvétius*, Paris, Durand, 1853, p. 72–73を参照）[23]。ときにエルヴェシウスは，女性を我がものとし，なぐさみものとすることを，立法が有効に活用しうる，行動の手段や重い約束として提示しているように思われる。このような奇妙な取り決めに女性たちが同意しているとか，喜びを感じているのだとエルヴェシウスが仮定しているという点については認めたとしても，女性の尊厳を生み出すことで女性の魅力となることについて，エルヴェシウスが凡庸な考えを持っていたことは認めなければならない。どうしてここに，気品ある優しい妻を深く愛した夫の姿を認めることができよう。

専ら教育の体系をうち立てようとした2点の分厚い著作のいかなる部分も，男性の伴侶にふさわしい女性について，適切に語られていないのである。フェヌロン[24]や，ルソーからさえも，なんとかけ離れていることだろう。家族の解体は，女性の教育をないがしろにした教育論に対する罰である。

なしてくれた善に免じて，過ちやなしえなかった善に関してはエルヴェシウスを許すことにしよう。しかし，エルヴェシウスが教育を重視したことに感謝しながらも，この偉大で優れた思想が極端に走ったことで損なわれてしまったことは忘れないでおこう。教育はすべてをなしうるわけではない。このような最終目標を掲げて教育の責務を受け入れることは，我々が果たすことができるわけでも，果たすべきでもない責任を背負いこむことを意味するだろう。我々に多くの分け前を与えようとするあまり，エルヴェシウスは結局，あまりに立派すぎるからと拒否せざるをえないところにまで我々を追い込んでしまう。我々に課された責務によって飾り立てられるのではなく，我々は押しつぶされてしまうのである。　［ジョルジュ・デュメニル］

［訳注］

1 エルヴェシウスの親族にかかわる伝記情報については次を参照。永冶日出雄「評伝 エルヴェシウス家の人々（その1）～（その11）」，『ヨーロッパ』第1～12号，愛知教育大学，1989～2000年。

2 マリー・レシュチンスカ（Marie Leszczyńska, 1703-68）は，ポーランド王スタニスワフ・レシュチンスキ（Stanisław Leszczyński, 1677-1766）の長女で，フランス国王ルイ15世の妃。後のルイ16世を含む，2男8女を産んだ。

3 アンヌ＝カトリーヌ・ド・リニヴィル（Anne-Catherine de Ligniville, 1722-1800）は，夫の亡き後，パリ近郊のオートゥイユで，後にイデオローグと呼ばれることになる思想家たちが集まる文芸サロンを主宰したことで知られる。この点については，次を参照。Jean-Paul de Lagrave (éd.), *Madame Helvétius et la Société d'Auteuil*, Oxford : Voltaire Foundation, 1999.

4 「『精神論』事件」と呼ばれることになった，18世紀フランス有数のスキャンダルの概要については，次が要を得ている。森村敏己「エルヴェシウスと『精神論』事件」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』第12号，1992年，10～14頁。

5 18世紀フランスの哲学者たちは，英国の哲学者ロック（John Locke, 1632-1704）と数学者ニュートン（Isaac Newton, 1642-1727）を範として人間精神の知的作用を分析しようと試みた。啓蒙期フランスにおけるロック哲学の受容に関しては，次を参照。ロラン・デスネ「18世紀のフランス哲学」野沢協訳（フランソワ・シャトレ編『啓蒙時代の哲学 西洋哲学の知IV』野沢協監訳，白水社，1998年，95-138頁）。John W. Yolton, *Locke and French Materialism,* Oxford : Clarendon Press, 1991.

6 本項目で『人間論』からの引用箇所で指示される頁は，リヨンで非正規に印刷されたと推測される2巻本のものとほぼ完全に一致している。この版本のタイトル・ページには，発行地がロンドンと記されている。当時のフランスでは，検閲を逃れるために偽りの発行地，発行者などを記すことは珍しくなかった。この版本は，スミスが作成した詳細な書誌においてH.6と付番されている。David Smith, *Bibliography of the Writings of Helvétius*, Ferney-Voltaire : Centre international d'étude du XVIIIe siècle, 2001, pp.318-321. なお，『人間論』は全体で10のsectionsに分かたれ，その中にいくかの章（chapitres）が置かれており，通常とは逆になっている。便宜的にsectionを「部」として訳出した。

7 この表現は『精神論』のいたるところで使用されているものの，指示されている440頁にそれが見られる版本は発見できなかった。以下，本項目で『精神論』からの引用箇所で指示される頁は，スミスの書誌でE.1AおよびE.2Aと付番された版本（パリ，1758年）のものとほぼ一致している。これらは，パリのデュプラン書店による正規初版本および第2版である。両者のページ割りは同一であるため，指示された頁の一致だけでは，どちらの版本を用

いていたのかわからない。初版本の出版許可が取り消され，禁書となったので，第2版は地下出版された非正規本ということになる。この箇所で参照されている表現は，これらの版本では438頁に存在する。おそらく，デュメニルの典拠指示が間違っているものと思われる。『精神論』は4つのdiscoursに分かたれ，その中に章（chapitres）が置かれている。便宜的にdiscoursを「編」として訳出した。

8 「第3編第1章」とすべきところを誤記したものと思われる。

9 ビュフォン（Georges-Louis Leclerc de Buffon, 1707–88）は啓蒙期フランスを代表する博物学者。全36巻を数える『一般と個別の自然誌』（*Histoire naturelle, générale et particulière*, 1749–88）は，博物学の枠を超えて同時代と後世の思想文化に多大な影響を及ぼした。

10 観念論者と感覚論者を対置する思想史的整理は，19世紀の思想史的枠組みを反映していると思われる。実際，ビュフォンを観念論者に分類してコンディヤックらと対置する評価は18世紀にはほとんど見られず，今日の研究においても稀である。

11 『精神論』に繰り返し現れるこの文章は，『精神論』の正規初版本（E.1A）および第2版（E.2A）では217頁には存在しない。また，出典を「同上」としている次の引用文は本文には存在せず，目次に付せられた梗概からとられたものだと推測される。目次では，この章が271頁から始まることが示されているので，これを誤って217頁と記したのだと推測される。この推測が正しいとすれば，デュメニルは『精神論』の本文を通読したわけではなく，主に目次を中心に検討したうえで，必要に応じて本文を参照しただけかもしれない。『人間論』についても，少なからぬ引用が章のタイトルから採られており，やはり目次を中心に検討していたものと推測される。

12 この引用文も本文には存在せず，やはり目次に付された梗概からとられたものだと推測される。

13 この一文は解釈がつかない。複数形に活用している動詞allerは単数形にすべきところを誤記したものと推測して訳出した。

14 対応箇所は，『精神論』の正規初版（E.1A）および第2版（E.2A）では635頁に認められる。

15 80頁とすべきところを誤記したものと思われる。ただし，当該の注は異なる話題に関するものである。

16 原文では「最大の公益，すなわち，最大多数の市民たちの最大の快楽と幸福」とある。意図的に省略したのかどうか，検討の余地があろう。

17 対応する文は41頁に見える。ただし，前半は「しかし，人間の教育をいっそう偶然に左右されないものとする手段はないものだろうか。それに成功するにはどうしたらよいのか」とあるのを要約している。このくだりでは，トルコの事例を隠れ蓑にカトリック教会が批判されている。

18 ここは，原文41頁の文章をかなり要約・圧縮したものを引用文であるかのように記している。

19 エマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803–82）は19世紀アメリカを代表する思想家で，当時隆盛をきわめた「超越主義」の祖とされる。教育をめぐっては，子どもの個性と自発性の尊重を主張しており，進歩主義教育の一つの思想的源泉と目されている。

20 対応箇所は，第2巻，459頁に見えるものの，注9ではなく，注7である。誤記と思われる。

21 ここで参照される頁は，指示された章と一致しているものの，該当する記述は本文に認められない。

22 ジャコト（Joseph Jacotot, 1770–1840）は，18世紀末～19世紀前半のフランスの教育者・教育思想家。教師から生徒への知識の伝達という旧来の教育観とは異なる，説明と理解から解放された生徒の意志に基づく新しい教育を提唱した。ランシエールが『無知な教師』（*Le maître ignorant*, 1987）でとりあげたことをきっかけに，現代でも再び注目されるようになった。

23 ダミロン（Jean Philibert Damiron, 1794–1862）は19世紀フランスに活躍した哲学史家の一人。全3巻の『18世紀哲学史のための覚書』（*Mémoirs pour server à l'histoire de la philosophie au XVIIIe siècle*）は，第一級の伝記史料として名高い。

24 フェヌロン（François de Salignac de La Mothe-Fénelon, 1651–1715）は，パリのサン＝シュルピス神学校に学んだ後，プロテスタントからカトリックへの改宗者の教導に携わった。依頼を受けて執筆した『女子教育論』（*Traité de l'éducation des filles*, 1687）では，各人の天性を存分に伸ばすよう求めた。1689年，王太孫ブルゴーニュ公の師傅に任ぜられ，教材として執筆した『テレマックの冒険』（*Les Aventures de Télémaque*, 1699）がベスト・セラーになった。1693年，アカデミー・フランセーズ会員に選出，1695年，カンブレの大司教に任命された。静寂主義（quiétisme）をめぐってボシュエ（Jacques Bénigne Bossuet, 1627–1704）と論争したことでも知られる。